

お茶から見るアジア (3)

ベトナムの茶樹は

中国より古いのか

須賀 努

茶の原産地は中国雲南省というのが古来定説になっている。しかし最近それを覆すような発見があったと聞き、興味を持った。ただ場所がベトナムと中国の国境地帯であったため、驚くほどのことではない気もしてきた。昔は国境など明確ではなかったかもしれない。今回はベトナム、ハノイに行き、ベトナムの茶について見聞してきた。

ハノイの茶

ベトナムのお茶と言えば、蓮の花が入ったロータスティーを思い出す人もいるだろう。あのお茶はホーチミンなどでは見掛けるが、ハノイでは土産物屋に置いてあるものが中心で一般のハノイ人が飲んでいとは思われない。ベトナムはベトナム戦争以前、北と南に分かれていたが、歴史的にはそれよりはるか前、北側は中国、南はヒンズーという全く異なる文化圏を抱えており、当然ながら風俗習慣も異なっている。

今回ハノイに行き、旧市街地に宿を取りお茶を探して歩くと、日本の風呂場にあるような低い椅子に腰掛けて、道路脇で茶をすすっている人によく出くわした。これは中国で言えば福建省アモイあたりに似通っており、勿論ホーチミンなどにはない習慣で、実に興味深い。どんなお茶を飲んでいのだろうかと覗くと、濃い目の緑茶が主流だった。これも意外だ。

ハノイの街角でほんの小さなお茶屋を開いている茶人のルーさん(八十三歳)は、一日に一種類のお茶しか出さない。近所の常連が殆どで、お客は黙って出されたお茶を飲み、世間話をして帰る。こんな風景が、実にハノイの街角に合っている。また生茶と呼ばれる加工していない茶葉を市場で買いい、自ら焼いて薬缶に熱湯を注ぎこむ茶の飲み方も教えてもらい、ベトナム茶の広がり、いや伝統的な慣習に少なからず驚いた。

国際博覧会の開かれたタイグエンベトナムの濃いお茶はどこで作られているのか、茶葉産地へ行き、事情を確認してみた。ハノイから西へ百キロあまり、タイグエン省タイグエン市付近は古くからお茶の産地としてベトナムでは有名。北ベトナムの人々はこのお茶が最高だということ。その中心、タンゲンという村へ行く。

この付近には大きな茶園はなく、各農家が個々に茶を栽培している。茶畑の中に先祖のお墓があるなど、ベトナムらしい風景も見られる。七十年前から茶を作っているという農家にお邪魔したが、昔風の煎り釜があり、手工業といった雰囲気。ベトナム人が飲む緑茶を生産しており、輸出などはしていない。

だが政府により昨年この村でベトナム初の国際茶葉博覧会が開かれた。その立派に作られた会場に足を運んだが、人気はまるでなく、これがお役人による箱モノ行政だ



樹齢500年の茶樹の前で。(2012年3月 筆者撮影)

と分かる。ベトナムの人は、隣国である中国を良く思っていないと何度も聞いたが、実は中国と同じ社会主義システムを採用しており、行政組織、社会システムから果ては、その腐敗、汚職までそっくり受け継いでいる。

ベトナムの紅茶

タイグエン省から田舎道を車で四時間、中国国境ラオカイへ向かう街道沿いにイエンバイ市がある。この街から西へ更に進むと、そこには山間の村が広がり、白樺の木の皮を使った碁盤の原料を干している風景が目を見詰める。

この辺りはタイグエンとは異なり、紅茶の産地として知られる。道路沿いにも茶畑

が広がり、山の斜面を茶樹が覆い、農民が機械で茶葉を刈り取っている姿が見られた。ベトナムの紅茶は、同じ社会主義国であった旧ソ連からの援助の見返りとして輸出されており、品質は決して高くはないが、それなりの量を生産していた。因みに中国もソ連と蜜月であった五〇年代は雲南省や福建省の紅茶をソ連に輸出していた歴史がある。社会主義圏の紅茶貿易は一つの面白いテーマではないかと思う。現在でもロシアへの輸出は続いているが、ここ数年は台湾資本が付近に工場を建て、茶葉を買い取り、加工しているという。近年の中国、台湾紅茶ブームもあり、ベトナムでも質の高い紅茶作りが求められてきている。

樹齢五百年の老茶樹

更に山を登って行くと、標高一千三百メートルあたりにモン族の村があった。ここで二十年間高級緑茶の研究・栽培をしているベトナム人を訪ねた。彼は少数民族の奥さんを貰い、現地に住んで溶け込んでいた。自力で中国などにも勉強に行き、茶葉の改良を行い、従来の濃い味とは異なる緑茶を開発していた。

一方この村には樹齢五百年とも言われる老茶樹が保存されており、この村の伝統的な生活と相俟って、実にいい雰囲気を出していた。このような茶樹と風景を見ると、茶の原産地はベトナム、と言われても

違和感はない。勿論最古の茶樹があれば更に奥地になるであろうが。

ハノイで十九世紀初から茶葉を扱っているお茶屋の六代目で新聞記者でもあるスオンさんに茶の歴史を聞いてみたが、打ち続く戦乱もあり、資料は殆ど残っていないという。実はプーアル茶の世界では、一九五〇年代に作られたハノイ茶という茶餅が存在し、実際にハノイで加工されていたと言われているが、その存在すら今回初めて聞いたという。ベトナムの茶の歴史は中国・台湾・香港との関係、旧ソ連との関係など奥深いものがあると思われるが、残念ながら探り当てるのは容易ではない。勿論どちらの国の茶樹が古いかという論争も始めればきりがないだろう。(コラムニスト)



ハノイのお茶屋の6代目、店の前のスオンさん。(2012年3月 筆者撮影)